

「見る・追う」及び「見られる・追われる」場面での 不快感情の構造に関する探索的検討

—Dark Triadに着目して—

山内 裕斗* 安藤 美華代**

問題

ストーカー規制法では、特定の者に対する恋愛や好意の感情、または怨恨の感情などにより、つきまとい、待ち伏せ、押し掛け、監視を行うことが触れられており、その他の法や条例では盗撮や窃視などの行為も触れられている。ストーキング被害者の感情面について、小林（2018）はストーキングに関するレビューの中で、被害に伴う感情として、恐怖や警戒心、苦痛、怒りなどの負の感情が多いことを示している。しかし、被害者がこのような負の感情を感じる一方で、加害者となる人物が意図してその行為を行っているかどうかということも1つの問題となるだろう。鈴木（2020）はこれまでのレビューより、ストーキング関連行動を8つのカテゴリーと、28の下位カテゴリーに分類している。その中には、望まれないSNS上のメッセージや、SNS上での監視、悪い噂の拡散などのカテゴリーが存在する。これらの行為は、相手が不快な思いをするだろうと意図して行う場合もあれば、相手が不快に思っているだろうとは考えず、意図しないまま行っている場合もあることが考えられる。Ybarra, Rohling & Mitchell（2016）は若者を対象に、ストーキング行為を、過度な親密性、追跡、煩わしい追求、攻撃性、脅威、監視の6種類の分類に基づき、自己申告的にストーキング行為の調査を行っており、その結果、このような行動について、若者の64%は行動を意図してはいなかったと答えている。また、尾行について鈴木（2020）は、加害者による報告では過小に、被害者による報告では過大に報告される可能性を示唆し、行為をする側とされる側での感じ方の違いを述べている。併せて、ストーキング行為を行う加害者内要因としては、犯罪歴や薬物乱用、被害妄想、アタッチメントの不安定さ、境界性パーソナリティ、幼少期の虐待経験などが考えられているが（Spitzberg & Cupach, 2007）、行為に及ぶ際の感情についての研究はほとんど見受けられず、どのような感情でストーキングを行うのか、ということは明らかにされていない。このように、ストーキング行為を「する」人と「される」人との間には、意図しているか、または、意図されている気がするか、という感じ方に違いが見られると考えられる。加えて、その意図や感じ方、感情には、場面や状況の違いが関連することが予想される。

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科 博士前期課程

** 岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授

しかしながら、意図していないような行為により、他人を不快にさせてしまうこと、また、意図していないであろう他人の行為によって、自身が不快になることは日常場面に多々存在する。例えば、山内・小野（2019）の研究では、他者の視線によって不快感情が喚起される場面を整理しているが、そのような場面では本人や他者がその行為を意図していないことが多い。また、山内・安藤（2020）は「見る・追う」と「見られる・追われる」場面についての検討を行っているが、ここで得られた結果は、程度が甚だしすぎるとストーキング行為に発展するような項目も含まれている。例えば、「他人のプライベートを知る」という項目は、意図していれば監視というストーキング行為に該当する可能性があり、「自分のプライベートを他人に知られる」という項目は、他人が意図しているかいないかに関わらず、不快に感じる人が多くなることが考えられる。

このような、行為を意図するかしないかの基準の一つとして、行為者の罪悪感や道徳観、何かもやもやすなどの不快な感情を考えることができる（古川・森永、2013）。しかし、そのような感情の感じ方が希薄であったり特殊な感じ方をする人も一定数存在する。そこで、ストーキング行為などをする側とされる側の感じ方の違いを検討するにあたって、対人関係で問題を抱えやすいパーソナリティと考えられている Dark Triad に注目する。Dark Triad は、マキャベリアニズム、サイコパシー傾向、自己愛傾向の総称とされている（Paullus & Willians, 2002）。Dark Triad 傾向の強い人は、非道徳的、他者操作的、冷笑的といったマキャベリアニズム傾向（Christie & Geis, 1970）、感情の希薄さ、罪悪感や共感性の乏しさ、衝動性を特徴とするサイコパシー傾向（Kiehl & Hoffman, 2011）を持ち合わせている（Paulhus, 2014）。そのため、Dark Triad 傾向の強い人は、他者から見られることで不快に感じる場面や状況に置かれても不快に感じる程度は少なく、自分が他者を見たり追ったりする場面でも、他者がどのように感じているかという共感性の欠如や罪悪感の欠如などにより、その行為に対して不快に感じることはあまりなく、感情の変化が少ないということが考えられる。また、自己愛傾向は、搾取性、優位性、自己顕示、特権意識、権力、虚栄を主な特徴とするとともに（Raskin & Terry, 1988）、自己愛における賞賛獲得欲求と、承認欲求における賞賛獲得欲求には強い相関が確認されている（鈴木・本田、2009）。このような特徴から、自己愛傾向の強い人は、他者から見られることや注目を集めることで認められたいという意識があることが考えられ、見られたい、追われたいなどの気持ちが大きくなることが考えられる。

そこで本研究では「見る・見られる」「追う・追われる」という場面に注目し、その際の感情を検討する。このような場面は山内・安藤（2020）も検討しており、日常生活の中でも多々見られる状況であるものの、前述のように、程度が甚だしいとストーキング行為に発展しうる。また、「見る」「追う」は自分がとる行動、「見られる」「追われる」は自分ではなく他者からされていると感じる行動と捉えることができる。そして、そのような場面において、不快感情の程度を調べた研究や、Dark Triad との関連について検討した研究はほとんど見あたらない。そこで本研究では、以下の2点を目的、及び仮説とする。

目的①：「見る・追う」場面と「見られる・追われる」場面で生じる不快感情の程度を調査し、両場面で不快感情が喚起される場面の構造を検討する。

仮説：「見る・追う」「見られる・追われる」場面での不快感情はともに、同様の因子構造になる。

目的②：「見る・追う」場面と「見られる・追われる」場面で生じる不快感情と Dark Triad との関連を検討する。

仮説：Dark Triad 傾向が強い人は、「見る・追う」及び「見られる・追われる」場面において、不快感情を感じにくくなる。

方法

1. 調査方法と調査対象

調査はSNSを利用し、第一筆者と同年代の知人や、その知人の紹介を頼りに、2020年夏季の10日間、無記名の自己記入式によるWeb調査を行った。Dark Triad 傾向は、青年期と成人期を対象とした研究が多く見られており、青年期と成人期の結果に明らかな違いが示されていないことから(阿部・太田・福井、2020)、調査の対象は青年期、成人期に該当する者とした。調査に協力の得られた180名のうち、すべての項目に回答している175名（男性39名、女性128名、その他6名、回答しない2名、平均年齢26.7歳、 $SD=9.6$ 、年齢幅15～57）を分析対象者とした。

倫理的配慮として、Web調査の説明文に、「研究実施計画」「研究に関する資料」「研究に参加することによる利益、不利益、危険性」「プライバシーおよび個人情報の保護」「研究計画のお知らせ」「同意及びその撤回」の6点について説明を行い、個人情報を保護し、最大限の配慮をしたうえで、学術雑誌に公表することを説明した。参加者が「同意」を選択したことで、調査協力への同意とみなした。また、回答は一人一回であるという教示も行い、複数回の回答は控えるよう依頼した。

2. 調査内容と使用した質問項目及び尺度

1) 「見る・追う」と「見られる・追われる」場面における不快感情に関する調査内容

予備的調査として、心理学を専攻する大学生5名（男性1名、女性4名、平均年齢21.2歳）を対象に行った“見る・見られる”、“追う・追われる”場面に関して、どのような場面があるのか、その場面で想定している相手との関係性や感情に関する半構造化のインタビュー調査を行い、回答をKJ法（川喜田、2017）により分類した。分類した結果に基づき、一つの場面において「見る・追う」場面と「見られる・追われる」場面で対になるよう、それぞれの場面で16項目ずつ、計32項目から成る項目を作成した（山内・安藤、2020）。

作成した質問項目を使用し、同じ場面において立場が変わったときに生じる感情について、どの程度不快感情を抱くのかを尋ねた。回答方法として、「不快に感じる」から「不快に感じない」の5段階評定で回答を求めた。具体的な質問項目はTable1とTable5に示した。

・不快感情を抱く「見る・追う」場面16項目

他人のプライベートを知る、電話で話している他人の声が耳に入る、というような他人のプライバシーを覗くような項目、自分の前を走っている車について行くというような項目であった。

・不快感情を抱く「見られる・追われる」場面16項目

自分のプライベートを他人に知られる、電話をしている声を他人に聞かれる、というようなプライバシーを覗かれると感じるような場面の項目、車の運転時などにうしろの車についてこられると感じるような場面の項目であった。

2) 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J)

Dark Triad傾向の強さを評価するために、田村・小塩・田中・増井・ジョナソン(2015)が作成したDTDD-Jを用いた。この尺度は、「マキャベリアニズム」「サイコパシー」「自己愛傾向」の3因子、各4項目の計12項目から構成されている。回答方法として、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」の5段階評定で回答を求めた。各因子を構成している項目群の得点を単純加算し項目数で除したものをその因子の得点(得点幅:1.0~5.0)とした。

結果

研究1 「見る・追う」場面での不快感情の因子構造、及び、DTDD-Jとの関連の検討

統計的な解析について、統計学的有意水準は5%とし、分析ソフトはR (version 4.0.2)を用いた。まず、「見る・追う」の場面を構成している16項目の平均と標準偏差を、全体と男女別で示した(Table1)。不快感情得点の最大は5点(不快に感じる)、最小は1点(不快に感じない)である。

最も不快感情の平均得点が高かった場面は、全体でも、男性、女性においても、「知らない人に話しかける」、次いで「周りで電話している他人の声が耳に入る」であった。最も不快感情の平均得点が低かった場面は、全体でも、男性、女性においても、「ライバルに勝った」であった。男女間での t 検定で有意な差が見られた項目は、「自分の前を歩いている知らない人について行くとき($t(df=66.26)=3.50, p<.001$)」の1項目であった。

Table1 全体、男女別での「見る・追う」場면을構成する項目の不快感情得点の平均と標準偏差

「見る・追う」の項目	全体平均 (SD)	男性の平均 (SD)	女性の平均 (SD)
マラソンで前に位置する選手を追いかけるとき	1.64 (0.98)	1.85 (1.29)	1.62 (0.91)
鬼ごっこで人を追いかけるとき	2.17 (1.31)	2.15 (1.50)	2.20 (1.26)
ライバルに勝ったとき	1.50 (0.82)	1.62 (1.02)	1.46 (0.77)
片思いをするとき	2.21 (1.25)	2.00 (1.36)	2.26 (1.21)
先輩と同じ進路や学校を選ぶとき	1.82 (1.14)	1.74 (1.09)	1.88 (1.18)
車を運転する際、前の車について行くとき	1.95 (1.06)	2.09 (1.23)	1.91 (1.00)
列に並ぶときに前にいる人を見るとき	1.91 (1.07)	1.79 (1.06)	1.97 (1.08)
自分の前を歩いている知らない人について行くとき	2.66 (1.29)	2.10 (1.19)	2.88 (1.26)
飲食店で、他人が食べている様子を見るとき	2.42 (1.29)	2.23 (1.29)	2.45 (1.25)
誰かを評価するとき	2.93 (1.30)	2.64 (1.42)	2.94 (1.24)
他人が勉強しているところを見るとき	1.94 (1.12)	2.03 (1.16)	1.91 (1.08)
他人のプライベートを知るとき	2.44 (1.22)	2.23 (1.09)	2.44 (1.23)
周りで電話している他人の音が自分の耳に入るとき	3.07 (1.38)	3.05 (1.43)	3.01 (1.35)
他人の携帯の画面が目に入るとき	2.33 (1.22)	2.00 (1.08)	2.41 (1.24)
知らない人に話しかけるとき	3.34 (1.38)	3.33 (1.49)	3.36 (1.34)
友人に何か相談するとき	2.53 (1.30)	2.41 (1.41)	2.55 (1.30)
見る・追う	2.30 (1.30)	2.20 (1.33)	2.33 (1.29)

次に、「見る・追う」の場면을構成している16項目に対して、平行分析をもとに因子数を4と定め、プロマックス回転、最尤法を用いて探索的因子分析を行った。得られた因子パターン行列において、因子負荷が.35に満たない項目を削除した。なお、項目選定の因子負荷の基準は、研究2の「見られる・追われる」場面での不快感情の構造との類似性を検討する本研究の目的に沿って定めることとした。また、床効果が見られる項目が8つ見受けられたため、それらの項目を除外して因子分析を行ったところ、3因子構造となる結果が得られた。そこで、研究2でも同様、天井効果、床効果が見られる項目を除外して因子分析を行ったところ、1因子3項目の結果となった。このような限られた項目による分析は、本研究の目的である、「見る・追う」及び「見られる・追われる」の2つの異なる立場における同じ場面での不快感情の構造を探索的に検討するのは厳しいと判断した。このような限界を踏まえつつ、まずはできるだけ項目数を維持した場合の構造について検討してみることとした。

そこで、項目を削除することで研究の連続性が失われる可能性や、不自然な解釈につながる可能性を孕んでいるという清水（2018）の指摘を参考に、項目は削ることなく16項目すべてを因子分析の対象とした。また、第四因子は2項目で構成されていたが、 α 係数が.38と非常に低い値であったことから、因子モデルから除外した。第四因子で削除した2項目は、「マラソンで前に位置する選手を追いかけるとき」と「鬼ごっこで人を追いかけるとき」であった。

第一因子は4項目で構成され、 α 係数は.67で、内的整合性は概ね保たれていると判断した。プライベートや他人の声、携帯の画面、など、より他人の個人的な部分を見るような項目であったため、「他人のプライベート窃視」因子とした。

第二因子は4項目で構成され、 α 係数は.70で、内的整合性は保たれていると判断した。車の運転や歩いている時、列に並んでいるときなど、自分の行動が制限される中で相手について行くような項目であったため、「追行」因子とした。

第三因子は2項目で構成され、 α 係数は.56であった。自分が行動を起こして追いかけるような項目であったため、「他人への能動的関わり」因子とした。

「見る・追う」場面での項目群10項目の α 係数は.75であった。

各因子を構成している項目群の得点を単純加算し、項目数で除したものをその因子の得点とした。各因子の不快感情得点の平均（標準偏差）は、「他人のプライベート窃視」が2.67（0.90）点、「追行」が2.25（0.87）点、「他人への能動的関わり」が2.95（1.12）点であった。「見る・追う」場面での不快感情の10項目の総得点の平均（標準偏差）は、2.57（1.32）点であった。

確認的因子分析における「見る・追う」場面での不快感情項目群の3因子モデルの適合度は、CFI=.92、TLI=.89、RMSEA=.06、SRMR=.06となり、概ね良好なモデル妥当性が示された。

因子モデルについて、男性と女性での人数の偏りがあったため、男女別で確認的因子分析を行った。その結果、男性ではCFI=.94、TLI=.92、RMSEA=.05、SRMR=.10、女性ではCFI=.88、TLI=.82、RMSEA=.07、SRMR=.06となり、男女ともに概ね良好なモデル妥当性が示された。

因子分析の結果は、Table2に示した。

Table2 「見る・追う」場面での不快感情項目群の因子分析結果

項目	F1	F2	F3
他人のプライベート窃視（平均=2.67、標準偏差=0.90、 α =.67）			
他人のプライベートを知るとき	.711		
周りにいる他人が電話していて、その声が自分の耳に入るとき	.683		
他人の携帯の画面が目に入るとき	.567		
誰かを評価するとき	.363		
追行（平均=2.25、標準偏差=0.87、 α =.70）			
自分の前を歩いている知らない人について行くとき		.789	
車を運転する際、前の車について行くとき		.641	
列に並ぶときに前にいる人を見るとき		.453	
飲食店で、他人が食べている様子を見るとき		.446	
他人への能動的関わり（平均=2.95、標準偏差=1.12、 α =.56）			
友人に何か相談するとき			.635
知らない人に話しかけるとき			.552
因子間相関			
F1		.416	.491
F2			.240

次に、「見る・追う」場面の総得点及び各因子得点と、DTDD-Jの総得点及び各因子得点の関連を検討するために、各変数間で相関分析を行った（Table3、Table4）。その結果、「他人への能動的関わり」とDark Triad、「他人への能動的関わり」とサイコパシー、また、女性において「追行」とDark Triadの間で有意な結果が見られた。

Table3 「見る・追う」場面での不快感情項目群とDark Triadとの相関分析結果

	Dark Triad	マキュベリアニズム	サイコパシー	自己愛傾向
見る・追う	.117	.097	.045	.102
他人のプライベート窃視	-.018	.044	-.112	.002
追行	.118	.114	.061	.077
他人への能動的関わり	.159*	.072	.149*	.133

* $p < .05$

Table4 男女別の「見る・追う」場面での不快感情項目群とDark Triadとの相関分析結果

	Dark Triad	マキュベリアニズム	サイコパシー	自己愛傾向
見る・追う	.096 / .150	.061 / .114	-.004 / .081	.141 / .121
他人のプライベート窃視	-.095 / .038	.007 / .067	-.275 / -.057	.005 / .048
追行	.069 / .181*	.042 / .159	-.035 / .149	.128 / .097
他人への能動的関わり	.149 / .169	.001 / .109	.284 / .089	.091 / .154

男性 / 女性

* $p < .05$

研究2 「見られる・追われる」場面での不快感情の因子構造、及び、DTDD-Jとの関連の検討

研究1と同様、統計的な解析について、統計学的有意水準は5%とし、分析ソフトはR (version 4.0.2)を用いた。

まず、「見られる・追われる」の場면을構成している16項目の平均と標準偏差を、全体と男女別で示した（Table5）。不快感情得点の最大は5点（不快に感じる）、最小は1点（不快に感じない）である。

最も不快感情の平均得点が高かった場面は、全体でも、男性、女性においても、「知らない人から自分の後ろをついてこられる」、次いで「自分の携帯の画面を他人に見られる」であった。最も不快感情の平均得点が低かった場面は、全体でも、男性、女性においても、「友人から相談される」であった。男女間での t 検定で有意な差が見られた項目は、「ライバルに負けたとき（ t ($df = 51.12$) = 2.30, $p < .05$)」「片思いをされるとき（ t ($df = 61.84$) = 2.36, $p < .05$)」「知らない人から自分の後ろをついてこられるとき（ t ($df = 48.58$) = 2.21, $p < .05$)」の3項目であった。

Table5 全体、男女別での「見られる・追われる」場面を構成する項目の

不快感情得点の平均と標準偏差

「見られる・追われる」の項目	全体平均 (SD)	男性の平均 (SD)	女性の平均 (SD)
マラソンでうしろに位置する選手から追われるとき	3.30 (1.34)	3.44 (1.39)	3.26 (1.31)
鬼ごっこで鬼に追われるとき	3.22 (1.51)	3.00 (1.45)	3.34 (1.45)
ライバルに負けたとき	4.09 (1.09)	3.74 (1.29)	4.26 (0.95)
片思いをされるとき	2.84 (1.35)	2.36 (1.33)	2.93 (1.30)
後輩から、自分と同じ進路や学校を選ばれたとき	1.93 (1.19)	1.90 (1.05)	1.95 (1.24)
車を運転する際、うしろから車についてこられるとき	3.82 (1.25)	3.55 (1.42)	3.90 (1.18)
列に並ぶときに後ろにいる人から見られるとき	3.73 (1.36)	3.56 (1.33)	3.87 (1.30)
知らない人に自分の後ろについてこられるとき	4.62 (0.77)	4.31 (1.03)	4.70 (0.68)
飲食店で、自分が食べている様子を見られるとき	4.11 (1.11)	3.74 (1.39)	4.22 (0.99)
誰かから評価されるとき	3.37 (1.25)	3.03 (1.31)	3.46 (1.23)
自分が勉強しているところを他人に見られるとき	3.37 (1.51)	3.05 (1.57)	3.48 (1.45)
自分のプライベートを他人に知られるとき	4.07 (1.13)	3.87 (1.28)	4.13 (1.06)
自分が電話している時の声を、他人に聞かれるとき	3.83 (1.32)	3.54 (1.43)	3.95 (1.24)
自分の携帯の画面を他人に見られるとき	4.27 (1.12)	4.18 (1.10)	4.32 (1.06)
知らない人から話しかけられるとき	3.06 (1.34)	2.72 (1.28)	3.16 (1.32)
友人から相談されるとき	1.56 (0.89)	1.44 (0.82)	1.58 (0.85)
見られる・追われる	3.45 (1.46)	3.21 (1.50)	3.53 (1.44)

次に、「見られる・追われる」の場面を構成している16項目に対して、平行分析をもとに因子数を2と定め、プロマックス回転、最尤法を用いて探索的因子分析を行った。得られた因子パターン行列において、因子負荷が.35に満たない項目を削除した。なお、天井効果が見られる項目が8つ、床効果が見られる項目が2つ見受けられたが、研究1と同様、測定上の課題を踏まえつつ、研究の連続性および解釈の可能性を考慮し、16項目すべてを対象として、できるだけ項目数を維持した場合の構造について検討してみることにした。

第一因子は8項目で構成され、 α 係数は.78で、内的整合性は保たれていると判断した。視覚的に自分の個人的な部分や、自分の外見や様子を見られるという項目が多いため、「プライベート被窃視」因子とした。

第二因子は4項目で構成され、 α 係数は.55であった。運転時や、遊び、勝負事で追われる状況に関する項目が多いため、「被追いかけ」因子とした。

「見られる・追われる」場面での項目群12項目の α 係数は.78であった。

先の分析と同様、各因子を構成している項目群の得点を単純加算し項目数で除したものをその因子の得点とした。各因子の不快感情得点の平均(標準偏差)は、「プライベート被窃視」が3.40(0.77)点、「被追いかけ」が3.60(0.85)点、「見られる・追われる」場面での不快感情12項目の総得点の平均(標準偏差)は、3.47(0.68)点であった。

また、確認的因子分析の結果、「見られる・追われる」場面での不快感情項目群の2因子モデル

の適合度は、CFI= .99、TLI= .99、RMSEA= .02、SRMR= .05となり、良好なモデル妥当性が示された。

男女別で確認的因子分析を行った結果、男性ではCFI= .66、TLI= .58、RMSEA= .16、SRMR= .12、女性ではCFI= .99、TLI= .99、RMSEA= .02、SRMR= .05となり、女性では良好なモデル妥当性が示された。

因子分析の結果は、Table6に示した。

Table6 「見られる・追われる」場面での不快感情項目群の因子分析結果

項目	F1	F2
プライベート被窃視（平均＝3.40、標準偏差＝0.77、 α ＝.78）		
自分のプライベートを他人に知られるとき	.705	
自分が勉強しているところを他人に見られるとき	.643	
自分が電話していて、周りにいる他人に自分の声を聞かれるとき	.617	
知らない人から話しかけられるとき	.518	
飲食店で、自分が食べている様子を見られるとき	.448	
友人から相談されるとき	.429	
列に並ぶときに後ろにいる人から見られるとき	.413	
誰かから評価されるとき	.369	
被追いかけ（平均＝3.60、標準偏差＝0.85、 α ＝.55）		
車を運転する際、うしろから車についてこられるとき		.711
ライバルに負けたとき		.561
鬼ごっこで鬼に追われるとき		.410
マラソンでうしろに位置する選手から追われるとき		.357
因子間相関	F1	.635

次に、「見られる・追われる」場面の総得点及び各因子得点と、DTDD-Jの総得点及び各因子得点の関連を検討するために、各変数間での相関分析を行った（Table7）。その結果、「見られる・追われる」場面での不快感情と Dark Triad、また、被追いかけ因子と Dark Triad、特に自己愛傾向と弱い正の相関が見られた。男女別でも同様に相関分析を行ったところ、男性では自己愛傾向、女性では Dark Triad 全般やサイコパシーにおいて、有意な相関が見られた（Table8）。

Table7 「見られる・追われる」場面での不快感情項目群とDark Triadとの相関分析結果

	Dark Triad	マキユベリアニズム	サイコバシー	自己愛傾向
見られる・追われる	.234**	.152*	.159*	.196**
プライベート被窃視	.184*	.111	.194*	.115
被追いかけ	.228**	.161*	.024	.264***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table8 男女別の「見られる・追われる」場面での不快感情項目群とDark Triadとの相関分析結果

	Dark Triad	マキユベリアニズム	サイコバシー	自己愛傾向
見られる・追われる	.250 / .292***	.157 / .187*	.001 / .291***	.359* / .179*
プライベート被窃視	.152 / .269**	.058 / .181*	.041 / .319***	.225 / .126
被追いかけ	.326* / .197*	.271 / .108	-.071 / .101	.456** / .196*

男性 / 女性

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

考察

本研究の目的は、「見る・追う」場面、「見られる・追われる」場面での不快感情の程度の構造を検討することと、Dark Triadとの関連を調べることであった。

研究1及び研究2より、場面ごとの不快感情の程度の構造について、「見る・追う」場面での不快感情では3因子構造、「見られる・追われる」場面での不快感情では2因子構造にまとまった。これは、「見る・追う」「見られる・追われる」場面での不快感情ともに、同様の因子構造になるだろうという仮説とは異なり、仮説は支持されない結果となった。まず、研究2での「見られる・追われる」場面での不快感情項目群の因子構造の解釈について、「見られる」と「追われる」を分けて考えたとき、プライベート被窃視因子は「見られる」、被追いかけ因子は、「追われる」に特化していると思われる。山内・安藤（2020）の予備的調査では「追う・追われる場面、見る・見られる場面」について尋ねていたため、「見られる・追われる」場面では2つの因子に分けられたと考えられた。一方、同様に尋ねていたにも関わらず、研究1の「見る・追う」場面では2因子ではなく3因子構造となった。まず、「見る・追う」場面は自分で自分の行動を変えることが比較的容易な自分主体の状況であるのに対し、「見られる・追われる」場面は行動の決定権が自分ではなく他者にある他者主体の状況であると言える。このような違いによって、同じ場面でも異なる不快感情の感じ方をしている可能性が示唆された。

次に、異なる因子構造について考察するにあたり、研究2の「見られる・追われる」場面の因子構造と比較すると、「見られる・追われる」のプライベート被窃視因子に含まれていた項目が、「見る・追う」場面では、他人のプライベート窃視、追行、他人への能動的関わりの3つの因子に分かれたように見て取ることができよう。プライベートを見られることは、場面に関わらず不快感情を感じるのではないか。一方、自分が他人のプライベートを見る行動には、場面によって感じる感情

が多様である可能性がある。さらに項目を見てみると、他人のプライベート窃視因子は日常場面で経験することが比較的少ないのに対して、追行因子は日常場面で多々経験する場面のように見ることができる。このような、経験する頻度の違いにより、不快感情を感じる程度は異なっていたのかもしれない。他人への能動的関わり因子は、他人のプライベート窃視、追行の2つの因子の項目と比べて項目数が少なく、信頼性係数も低かった。「友人に何か相談する」「知らない人に話しかける」といった内容で構成されていたことから、対人関係で生じる不快感情のほんの一部を取り上げているに過ぎず、曖昧な概念構成になっている可能性が考えられる。対人関係で生じる不快感情は、今回取り上げたことのみならず数多く存在する。したがって、対人関係で生じる不快感情については、より場面を限定したりするなど、再度検討する必要がある。このように、「見る・追う」場面では、不快感情を抱く場面の認識や頻度によって、不快感情の構造が異なったと考えられる。

「見られる・追われる」の「被追いかけ」の信頼性係数も低かった。ここに含まれている2項目は、「見る・追う」で削除した項目であった。今回選定した項目で「被追いかけ」としての不快感情を測定するのには、不十分であったと考えられる。不快感情が生起される「追いかけられる」場面の選定を再度見直す必要がある。そのうえで、不快感情を生起する詳細な場面の選定を行う必要があると考えられる。

また、不快感情を感じる「見る・追う」場面、「見られる・追われる」場面と Dark Triad との関連として、「見られる・追われる」場面での不快感情と Dark Triad、被追いかけ因子と自己愛傾向の間で弱い正の相関が見られた。これは、Dark Triad 傾向が強い人は、「見る・追う」及び「見られる・追われる」場面において、不快感情は感じにくいだろうという仮説とは異なる結果となった。本研究の結果からは、感情の希薄さや冷淡さなどを特徴とする Dark Triad 傾向が強い場合、「見られる・追われる」場面を不快に感じる傾向があり、「見る・追う」場面でも、負の相関は見られなかった。横山・坂田・黒川・生和（1992）によると、同じ空間内で自分の様子が他者によって「観察される」という受動的な立場に立たされた場合には、不安や緊張を高めることになる。また、Dark Triad 傾向が強い人は、他者を自分より下に見る傾向がある（Black, Woodworth & Porter、2014）。ここから、他者操作性や支配性がある Dark Triad 傾向が高い人は、自分が見られる側や追われる側になると、他者から操作されている、支配されている、という感覚により、他者から下に見られているという認知が働き、より不快に感じるようになるということが考えられる。また、自己愛傾向と被追いかけ因子との弱い正の相関より、自己愛傾向は、他者から注目されたい、認められたいなどの欲求があるものの、注目される準備ができていない、もしくは注目されたくない場面において他者から見られたり追われたりすることは、自分の弱みを見られるように感じ、一段と不快感が大きくなることが考えられる。あるいは、自分が勝ちではなく負けるとき、負ける危険があるときには、自分をよく見せたいけれどそれができない状況になるため、不快感を感じやすくなるというようにも考えることができるだろう。しかし本研究では、先に述べたように、使用した「見る・追う」「見られる・

追われる」の質問項目群の信頼性・妥当性の不十分さが示唆されることから、さらなる検討が必要である。

男女別での分析結果からは、男性では自己愛傾向と「見られる・追われる」場面での不快感情、特に被追いかけて因子で有意な正の相関が見られたのに対し、女性ではサイコパシーと「見られる・追われる」、特にプライベート被窃視因子で有意な正の相関が見られた。被追いかけて因子は、遊びや勝負事で追われるような項目が多く含まれており、そこから競争や勝ちなど、自分が優勢になることを意識することができる。男性は女性より競争的な場면을好み（水谷・奥平・木成・大竹、2009）、勝ちたいのだけれど不利な状況に置かれているときには、自分の負けや不利な様子を他者に見られたくないというプライドから、不快になっているのかもしれない。しかしながら、本研究での男性の調査協力者は女性に比べて非常に少ないため、今後人数を増やしてさらなる検討が必要である。一方で女性では、見られることや追われることに対する不快感情得点が男性よりも高くなっており、自分の内面を他者に知られるプライベート被窃視因子についても不快感が高くなっている。女性でサイコパシーが高い人は、他者の情報や行動には興味がなくとも、逆に自分のことを他者に知られたり見られたりすることには不快感を抱くということが示唆される。

本研究の課題と今後の展望

本研究の結果からは、「見る・追う」場面、また、「見られる・追われる」場面で抱く不快感情の構造、また、そのような場面と Dark Triad との関連が示唆された。しかしながら、調査協力者では男女間での人数の偏りが見られ、また、床効果や天井効果が見られる項目が多く存在した。今後は、男女の人数を考慮し、さらに協力者を募り、項目の妥当性についても再検討を行う必要があるだろう。また、本研究では対人関係で困難を抱えやすい Dark Triad 傾向を測るための尺度を用いた。しかし、相関は弱いものが多く、明確な結論を述べるには難しい結果となった。Dark Triad と関連の強い他のパーソナリティ特性を用いて再検討の余地があるとともに、ストーキング行為を考えたときの加害者内要因としては犯罪歴や薬物乱用、アタッチメントの不安定さ、境界性パーソナリティ、幼少期の虐待経験などが考えられているため（Spitzberg & Cupach, 2007）、今後は、今回取り上げなかったパーソナリティ特性、幼児期の経験、情緒の安定性などとの関連について検討する余地があるだろう。相関がほとんど見られなかった「見る・追う」場面では、他人の様子を見てしまう罪悪感や、他人の様子が目に付く、気になる、など、好奇心や敏感さといった尺度などを用いることも有用な研究になる可能性が示唆される。

また、本研究での質問項目を作成する際には、自分の行動を、自分を知らない人から見られるよりも知っている人に見られる方が、気になったり緊張したりするという回答が挙がった一方で、勉強している様子は知っている人から見られていた方がやる気が出るとする回答も挙がっていた（山内・安藤、2020）。このように、行動の種類と、それを見る相手との関係性について、より詳細に

調査することも有意義な研究となることが考えられる。「見る・追う」について、因子分析を行う際には因子負荷や信頼性係数を考慮して、項目を6つ削除している。様々な手法や解釈可能性を考えたうえで今回のような結果に至ったことは、「見る・追う」という場面では人によって様々な捉え方をしており、概念として測定するには、より詳細な検討が必要だと考えられる。今後、「見る・追う」を測定する際には、場面想定法などの、より詳細な場面設定にして検討する必要があるだろう。

さらに、本研究では、見ることや追うこと、見られることや追われることに関する不快感情に注目してその構造を検討した。しかし、見ることや見られることの根幹となる視線には、アイコンタクトに代表されるように、相手との積極的な関与や、意図的な自己表出、感情表出をもたらす機能がある（大坊、1999）。他者から認められたい、分かってもらいたい、目立ちたい、などを特徴とする、承認欲求や自己顕示欲が強い人なども、他者から見られることでその欲が満たされるということもあるだろう。そのような人でなくとも、スポーツの試合で応援されたり、良い成績や業績を褒められたりするときなども、行動や結果を見られる場面に変わりはないが、応援されたり褒められたりして嬉しい、感情が高まる、よりやる気になる、など快感情が喚起されることは予想がつく。このように、他者から見られることで快感情が喚起される人、またはそのような場面に焦点を当てた快感情の項目群や尺度を作成することも、今後の有用な研究になることが期待されるだろう。

謝辞

本研究に関して、調査に協力していただきました皆様、貴重なご助言やご指摘をいただきました先生方や研究室の皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 阿部晋吾・太田仁・福井斉 (2020). 高校生における性格特性の Dark Triad と援助要請態度との関連 関西大学心理学研究 11, 1-9.
- Black P.J., Woodworth M., & Porter S. (2014). The Big Bad Wolf? The relation between the Dark Triad and the interpersonal assessment of vulnerability. *Personality and Individual Differences*, 67, 52-56.
- Christie, R., & Geis, F. L. (1970). *Studies in machiavellianism*. New York: Academic Press.
- 古川善也・森永康子 (2013). 人は罪悪感を感じた時に何をするか—罪悪感喚起状況別の分類— 広島大学心理学研究 13, 61-68.
- 大坊郁夫 (1999). 視線の交錯. 中島義明・安藤清志・子安増生・他編、心理学辞典. 有斐閣
- 川喜田二郎 (2017). 発想法 創造性開発のために 改版 中央公論新社
- 警視庁 (2016). ストーカー規制法 Retrieved from <https://www.keishicho.metro.tokyo.jp/kurashi/higai/dv/kiseho.html> (2020年6月28日)

- Kiehl, K. A., & Hoffman, M. B. (2011). The criminal psychopath: History, neuroscience, treatment, and economics. *Jurimetrics*, 51, 355-397.
- 小林大介 (2018). 日本におけるストーキング被害者の心理社会的状況に関する研究動向と課題 東北大学大学院教育学研究科年報 67, 1, 267-285.
- 水谷徳子・奥平寛子・木成勇介・大竹文雄 (2009). 自信過剰が男性を競争させる 行動経済学 2, 60-73.
- Paulhus, D. L. (2014). Toward a taxonomy of dark personalities. *Current Directions in Psychological Science*, 23, 421-426.
- Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, 36, 556-563.
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 5, 890-902.
- 清水和秋 (2018). 因子分析的研究における misuse と artifact 関西大学社会学部紀要 49, 2, 191-211.
- Spitzberg, B. H., & Cupach, W. R. (2007). The state of the art stalking: Taking stock of the emerging literature. *Aggression and violent Behavior*, 12, 64-86.
- 鈴木拓朗 (2020). ストーキング関連行動に関する一考察：研究知見の整理と行動指標の抽出 東京大学大学院教育学研究科紀要 59, 1-12.
- 鈴木公啓・本田周二 (2009). 承認欲求の賞賛獲得欲求と自己愛の賞賛獲得欲求：この2つは何が違うのか？ 日本パーソナリティ心理学会発表論文集 18, 92-93.
- 田村紋女・小塩真司・田中圭介・増井啓太・ジョナソンピーターカール (2015). 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み パーソナリティ研究 24, 1, 26-37.
- 山内裕斗・安藤美華代 (2020). 「見る・追う」と「見られる・追われる」場面に関する検討 中国四国心理学会第76回大会
- 山内裕斗・小野史典 (2019). 視線に関する不快感情尺度の作成、及びメタ認知との関連 ストレス科学研究 34, 65-71.
- Ybarra, Michele L., Langhinrichsen-Rohling, Jennifer, & Mitchell, Kimberly J. (2016). Stalking-like behavior in adolescence: Prevalence, intent, and associated characteristics. *Psychology of Violence*, 7, 2, 192-202.
- 横山博司・坂田桐子・黒川正流・生和秀敏 (1992). 他者共在が不安反応に及ぼす効果：SOCIAL ANXIETY についての実践的研究(1) 実験社会心理学研究, 32, 1, 34-44.